

# 生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2004年度

2005年3月

生駒市教育委員会

# 生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2004年度

2005年3月

生駒市教育委員会

## はしがき

生駒市内は、国指定史跡の行基墓、国宝の長弓寺本堂をはじめとして多くの文化財があります。

生駒市教育委員会では、このような先人が残した貴重な文化財の保護に努め、地下に眠る遺跡についても発掘調査を継続的に実施してまいりました。本報告書は、平成16年度に発掘調査を実施したもののうち、国と奈良県の補助を受けて個人住宅の建築工事に先立つ発掘調査についてその結果をまとめたものです。本書がわずかでも各分野の研究の一助となり、地域の歴史を掘り起こすこととなれば望外の喜びです。

本年度の調査におきましては、建築主の皆様ならびに調査地周辺の皆様、関係諸機関に多くのご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。

また、今後とも本市の文化財保護に対する御理解と御支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

平成 17年 3月

生駒市教育委員会

教育長 中川克己

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助50%・県費補助25%・市負担25%（総額1,000,000円）で実施した、個人住宅の建築工事にともなう発掘調査の成果を主として掲載した概要報告書である。
2. 現地調査は、調査原因にかかる個人の依頼を受けて、奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、生駒市教育委員会生涯学習振興課 矢田直樹が担当した。
3. 現地の土色および土器の色調は、「新版 標準土色帖 1999年版」を参考にしている。
4. 遺構写真・遺物写真は矢田が撮影した。
5. 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、生駒市教育委員会において保管している。
6. 調査および本書の作成にあたり、下記の方々からご指導・ご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。（敬称略・順不同）  
寺澤 薫　　岡林孝作　　清水昭博　　吉川真司　　小川暢子  
加藤俊亮　　上田正子　　松本恵美子　　箕浦保彰　　箕浦真一郎  
株式会社アート
7. 現地調査および本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の協力を得た。  
池田計彦　　石田和哉　　大木祥太郎　　岡田雅彦  
島田侑子　　城下奈美　　中居惣子　　松原智子
8. 本書の執筆・編集は、矢田が行った。

裏表紙　　文化財愛護のシンボルマーク

両手のひらと日本建築の伝統的要素である組物（くみもの）をイメージしたパターンを3つ重ねることにより、過去・現在・未来にわたる永遠の伝承を表現したものです。

## 目 次

はしがき

例言

目次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要 ..... 1

II 位置と環境 ..... 2

- 1 地理的環境
- 2 歴史的環境

III 中葉畠・一水口遺跡第9次発掘調査 ..... 6

- 1 はじめに
- 2 位置と環境
- 3 遺跡の調査
- 4 まとめ

IV 菜畠城跡第1次発掘調査 ..... 15

- 1 はじめに
- 2 位置と環境
- 3 遺跡の調査
- 4 まとめ

図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 生駒市位置図 .....	2
第2図 地形図 .....	3
第3図 主要遺跡分布図 .....	4
第4図 調査地周辺遺跡分布図 .....	6
第5図 調査位置図 .....	7
第6図 調査区配置図 .....	8
第7図 遺構平面図・土層図 .....	9
第8図 出土遺物実測図(1) .....	10
第9図 出土遺物実測図(2) .....	11
第10図 中菜畑・一水口遺跡集落想定図 .....	13
第11図 調査位置図 .....	15

## 表目次

第1表 2004年度（平成16年度）埋蔵文化財発掘届出・通知、 遺跡有無確認踏查願、発掘調査件数 .....	1
第2表 2004年度（平成16年度）実施発掘調査 .....	1
第3表 清掃構一覧 .....	10
第4表 中菜畑・一水口遺跡 調査一覧 .....	12

## 図版目次

図版 1 生駒市全域航空写真	
図版 2 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 調査地付近航空写真 2 着手前状況	
図版 3 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 遺構検出状況 2 遺構検出状況	
図版 4 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 東壁土層 2 東壁土層（部分）	
図版 5 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 南壁土層（部分） 2 溝5(SD05)弥生土器出土状況	
図版 6 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 遺構掘削後状況 2 遺構掘削後状況	
図版 7 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 遺構掘削後状況 2 遺構掘削後状況 東側	
図版 8 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 1 ピット1(SP01) 2 溝2(SD02)・溝3(SD03)	
図版 9 中菜畑・一水口遺跡第9次発掘調査 出土遺物	
図版10 菜畑城跡第1次発掘調査 1 菜畑城跡遠景 2 着手前状況	
図版11 菜畑城跡第1次発掘調査 1 イモ穴 2 イモ穴	
図版12 菜畑城跡第1次発掘調査 1 イモ穴 2 トレンチ南壁	

## I 埋蔵文化財発掘調査の概要

生駒市では、高度経済成長期以降、土木工事等の開発行為が急速に進み、地理的環境・歴史的環境が大きく変化している。それにともない、遺跡はその姿を消しつつある。

このような状況のなかで、生駒市教育委員会では、1987年に市内の遺跡分布調査を実施し、「生駒市遺跡分布調査概報」を刊行した。1990年に新たな調査成果をもとに、「生駒市遺跡地図」の改訂を行った。その後も、奈良県立橿原考古学研究所や生駒市教育委員会の調査等により遺跡範囲の拡大や新規発見が相次いでいる。これを受け2004年に「生駒市遺跡地図」の改訂を行い、保護に努めている。

2004年度（平成16年度）3月15日現在で生駒市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数は第1表のとおりである。また、2004年度（平成16年度）3月15日現在で実施した発掘調査は第2表のとおりである。

本書には、国庫補助・県費補助事業として実施した中葉畠・一水口遺跡、菜畠城跡の調査概要を収録している。

埋蔵文化財発掘 届出 通知	合計	遺跡有無確 認踏査願	試掘・確認 調査	発掘調査	立会調査	慎重工事	調査合計
14	0	14	4	0	7	1	0

第1表 埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数

番号	市遺跡地図番号 県遺跡地図番号	遺跡名	調査地	現地調 査期間	調査原因 (原因者)	調査 面積	備 考
1	81 4-D-54	(第1次)	緑ヶ丘1452 の一部ほか	040628	造成用道路 (森高建設株式会社)	10m <sup>2</sup>	遺構・遺物なし
2	66 4-A-2	遺物散布地 (第2次)	西松ヶ丘1-35	041004	店舗付きマンション (梅本 弘)	5 m <sup>2</sup>	遺構・遺物なし
3	41 4-A-15	長命寺西塩跡 (第1次)	西松ヶ丘 1518-42, 1518-45	041124	個人住宅 (加藤智亮)	5 m <sup>2</sup>	遺構・遺物なし
4	51 4-D-39	中葉畠・ 一水口遺跡 (第9次)	西葉畠町 1496-3, 1496-4	041129 + 041203	個人住宅 (上田正子、松本恵美子)	32m <sup>2</sup>	本書目所取
5	53 4-C-5	葉畠城跡 (第1次)	西葉畠町 1663, 2934	041208	個人住宅 (箕浦真一郎)	4 m <sup>2</sup>	本書目所取
6	51 4-D-39	中葉畠・ 一水口遺跡 (第10次)	中葉畠二丁目 1129-1	041215 + 041221	老人福祉施設 (社会福祉法人協同福祉会)	53m <sup>2</sup>	古墳時代の土杭、溝など を検出
7	32 4-A-6	田原口城跡 (第7次)	俵口町 919-1, 920-1	050119 + 050127 + 050128	宅地造成・分譲住宅 (大陽興産株式会社)	25m <sup>2</sup>	谷の礫土から石器、須 恵器、中世土器が出土

第2表 2004年度（平成16年度）実施発掘調査

## II 位置と環境

### 1 地理的環境 [第1・2図、図版1]

生駒市は、奈良県の北西の端に、その名がしめすとおり生駒山脈の東側に位置している。東西7.8km、南北14.9kmと南北に細長く、西は大阪府、北東は京都府、東は奈良市と大和郡市、南は平群町、斑鳩町に接する。

地形的には、主峰生駒山（642m）を中心にした山脈の東斜面と、矢田丘陵から西の京丘陵にはさまれた山間部にある。西山中と称されることもある。そうしたなかで、複数の河川によるわずかな谷底平野がみられ、平野部ごとに地域を細分することが可能である。

北部から北東部にかけては、富雄川水系の谷底平野と丘陵部が広がっている。

北西部から南部の地域は、生駒山地と矢田丘陵にはさまれた盆地状の地域である。天野川水系と竜田川水系にわかれており、南北二つの谷底平野が接するような関係にある。

北西部は、天野川水系の谷底平野である。川の東側の平野を生駒市、西側を四条畷市と、川により大阪府との境界をなしている。

中央部から南部は、竜田川による平野を形成している。東西の幅が数百mと比較的に広い場所もあり、市内では比較的平坦な地域が広がっている。

### 2 歴史的環境 [第3図]

古くより大和と河内を結ぶ交通の要衝であった生駒は、縄文時代から人の存在が確認されている。市南部の小平尾町付近で縄文土器が出土したといわれ、南田原町地内での発掘調査では石器が出土している。その実態はまだ不明である。

弥生時代については、萩原遺跡が古くから知られていたが、90年代の奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査から、弥生時代の遺構があいついで発見されている。中菜畑・一水口遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居域を区画するとみられる溝が、西畑遺跡では、中期の住居跡が確認されている。2001年の萩原遺跡の調査では、弥生時代中期の水路とみられる溝を検出している。

古墳時代の遺跡として、竹林寺古墳や竜田川の流域の遺跡があげられる。竹林寺古墳は、前期の前方後円墳で当初の全長は60m程度あつたと考えられている。1939年に後円部の主体部の調査が実施され、撥



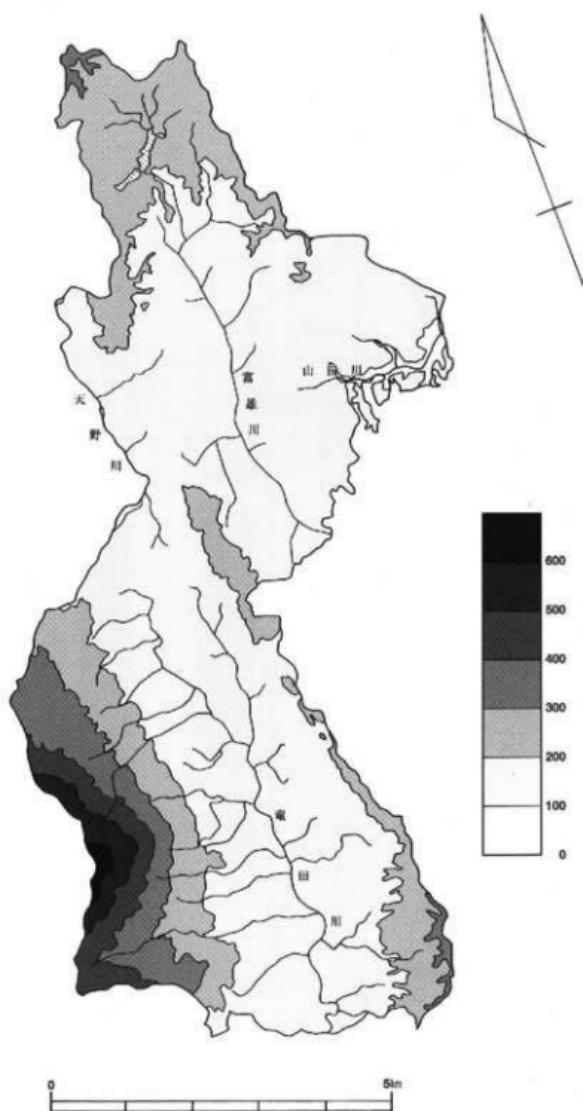
第1図 生駒市位置図



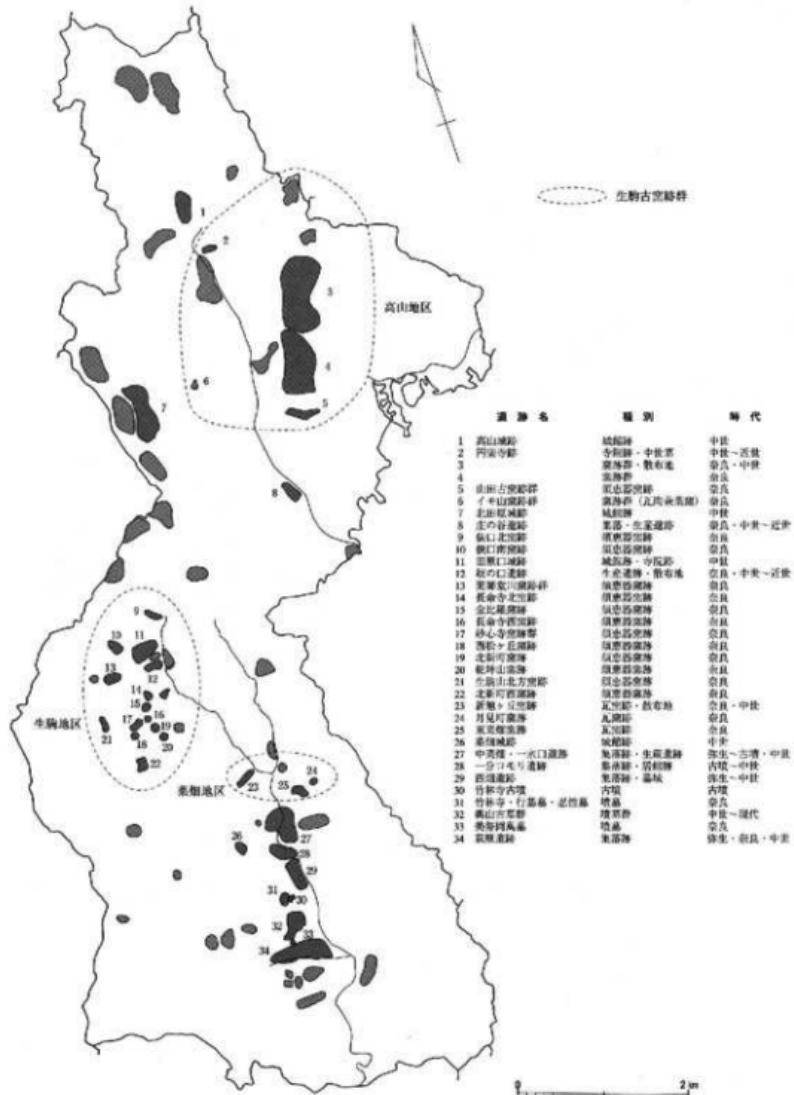
萩原遺跡出土石臼



竹林寺古墳



第2図 地形図



第3図 主要道路分布図

乱後であるが、特異な内部構を持つことが明らかとなっている。遺物として、「長宜子孫」の銘をもつ内行花文鏡をはじめ、石劍、鉄刀、鐵劍、鉄釘、円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などが出土している。

また、一分コモリ遺跡では居館にめぐる大溝が確認されている。西畠遺跡は弥生時代に引き続き集落が存在し、土坑からは大量の土器が出土している。

奈良時代になると、生駒は須恵器生産の拠点として市内各所に窯が営まれる。その数は不明だが、市域の中部から北部にかけての地域で相当の数があったことであろう。金比羅窯跡からは「宮」と線刻された杯蓋が出土している。上町の庄の谷遺跡はそうした須恵器生産にかかる工人の集落であろう。西畠遺跡では大型建物跡が検出されており、この地域を治める拠点と想定されている。萩原では明治5年に開墾中に銅板墓誌が発見され、奈良時代の官人の美努岡萬の墓所が明らかとなっている。また行基は、「行基年譜」によると、慶雲4(707)年に「生馬仙房」を建立し、和銅7(714)年までここで修行を続けた。行基はここを拠点に新都平城京での布教をはじめたのである。この仙房は、有里の竹林寺をさとされ、境内には行基の墓所がある。生駒は平城京からも近く、人々の活動も平城京と密接に関係していた。

中世に入ると、鷹山庄・上鳥見庄・生馬庄・田原庄などの莊園が成立し、他の大和と同様に興福寺の支配がおよぶ。『大乘院寺社雜事記』や『多門院日記』などには、一乘院の衆徒の鷹山氏や「生馬両職人」と称された莊官達がたびたび姿を見せ、活動の一端をうかがうことができる。こうした在地勢力は、高山城や北田原城、菜畠城など市内各所に中世城郭を築いている。文暦2(1235)年に竹林寺の僧寂滅が行基の墓所を発掘し、舍利瓶と墓誌を発見する。行基信仰が盛んになるなかで、寂滅、忍性らは行基をならい社会事業を進め人々の信仰を集めようになる。忍性は、嘉元元(1303)年に鎌倉極楽寺で入寂したが、遺命により行基の眠る竹林寺にも分骨された。墓所は奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査がなされ、花崗岩製八角形柱状外容器の内部に銅製骨蔵器が安置されていた。また、興山西院には、正元元(1259)年の銘を持つ宝鏡印塔、有里の円福寺には2基の鎌倉時代の宝鏡印塔が残り、かつての信仰をうかがわせる貴重な遺物である。長弓寺本堂、高山八幡宮本殿など国宝・重要文化財に指定されている建造物は、中世の建築様式をよくの残るものである。生駒の中世は、活発な人と物の交流が行われていたことを裏付けている。発掘調査の出土遺物量が、中世、とくに13世紀後半から14世紀にかけてのものが増加することがそれを裏付けている。

近世に入り江戸時代の生駒は、添下郡と平群郡の22の村に分けられ、旗本領と郡山藩領より構成される。幕末の慶応4(1868)年には、旧旗本松平氏領の11ヶ村の領民が辻村にある代官の矢野陣屋を取り囲むという事件が起こる。その際に作成された村ごとの傘形連判状が今に伝わっている。

近代になると町村制の施行により、北倭村、北生駒村、南生駒村が成立する。その後、合併をくり返し、現在の市域を有するにいたり、昭和46年に市制が施行される。



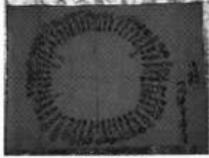
金比羅窯出土杯蓋



行基墓



長弓寺本堂



傘形連判状

### III 中菜畑・一水口遺跡第9次調査

#### 1 はじめに

今年度、中菜畑・一水口遺跡では、2件の発掘調査を実施した。

第9次の発掘調査は、西菜畑町1496-3、1496-4で個人住宅建築工事によるものである。調査期間は、2004年11月29日から12月3日まで、調査面積は約32m<sup>2</sup>で実施した。ここで報告する。

第10次の発掘調査は、中菜畑二丁目1129-1で老人福祉施設の建築工事によるものである。2004年12月15日から12月21日に調査面積約53m<sup>2</sup>で実施し、古墳時代の土坑2基、中世の溝などを検出した。

#### 2 位置と環境 【第4・5図、図版2】

調査地は生駒谷のほぼ中央部に位置している。竜田川に沿った地域では、平坦な谷底平野がひろがっている。川岸から少し離れると、河岸段丘が発達した場所もある。西と東からは山の尾根とそれにはさまれた谷が竜田川に向かってのびている。

今回の調査地は、竜田川と調査地南側を流れる出合川の川岸より一段高い場所に位置しており、周辺はなだらかに南に向かって下がる平坦な場所である。



第4図 調査地周辺遺跡分布図

調査地周辺は、竜田川に沿って南北約1kmにわたって壱分遺跡群と称される遺跡地帯がひろがっている。弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。調査地はその最北の中菴畠・一水口遺跡の一角に位置し、過去8度にわたって調査がなされてきた。第1次調査では、中世の水利施設を検出し、第3次調査では、弥生時代後期から古墳時代の排水用と見られる溝群などを検出している。第8次調査では、古墳時代の水路を検出した。

一分コモリ遺跡では古墳時代の豪族の居館にめぐる濠などを検出している。西畠遺跡では弥生時代、古墳時代の集落や奈良時代の大型建物などが存在する。このように市内でも有数の遺跡地帯である。

### 3 遺跡の調査

#### (1) 調査区と層序 〔第6・7図、図版2~5〕

調査地は、中菴畠・一水口遺跡の南西部に位置している。遺跡の西部域での発掘調査は未実施のため、遺跡内容の確認に目的を置いて調査を行った。試掘を行った結果、壁面で溝構造を確認し、南北約4m×東西約5.8mの調査区を設定し調査を実施した。

基本層序は、整地土（1層）、灰色細粒砂（2層、耕作土）、明黄褐色粘性シルト（4層、床土）、灰色細粒砂（6・7層）、明黄褐色粘性シルト（8層、地山）となる。



第5図 調査地位置図

(2) 遺構 [第7図、図版6~8]

明黄褐色粘性シルト層の上面で遺構を検出した。

古墳時代

ピット1 (SP01)

調査区の東の端で検出した。排水溝で遺構の一部を切っている。円形の掘方で、検出直径40cm、深さ5cm、底部で柱痕跡を検出し、直径10cm、深さ6cmをはかる。埋土から古式土師器の小片が出士した。調査区内では対になる柱穴を検出することはできず、調査区東側へ建物は続くものとみられる。

中世 [第3表]

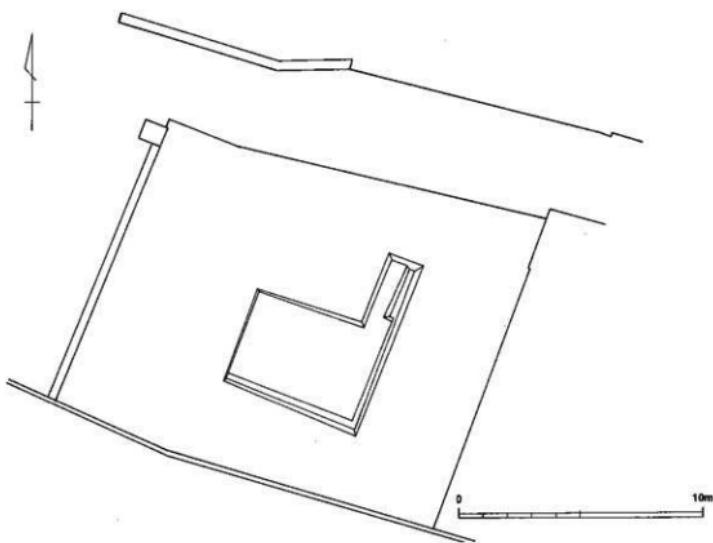
南北方向に2条、東西方向に10条の溝を検出した。

溝1 (SD01)

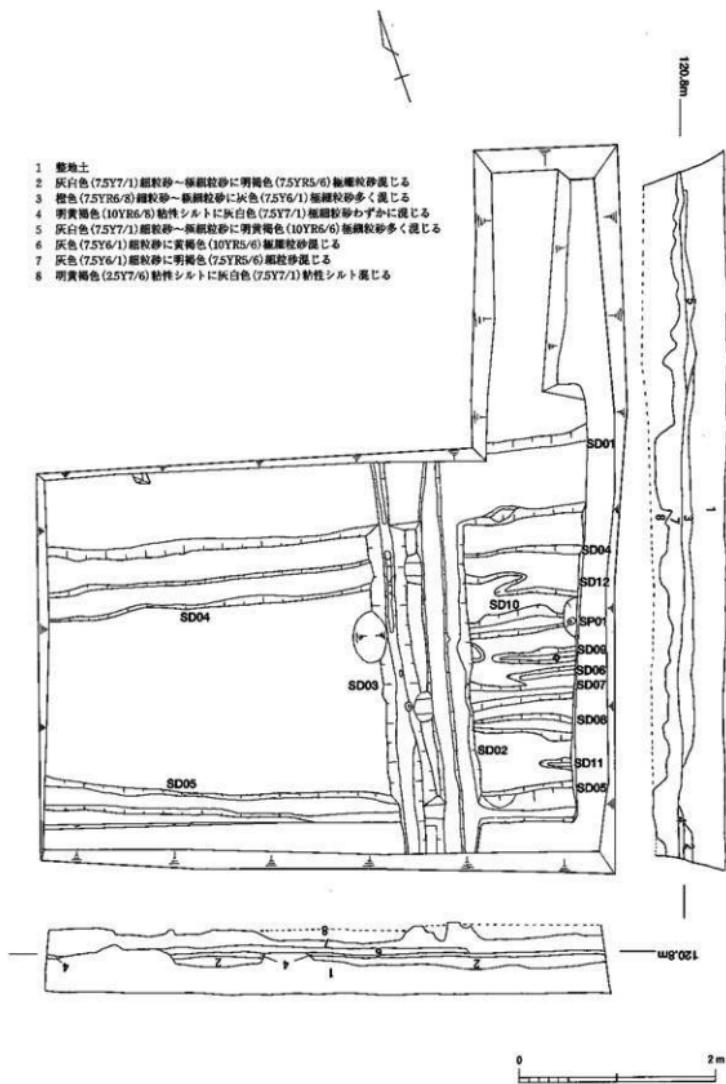
東西方向にのびる溝。検出幅80~85cm。断面形状が台形をしており、底部は平たい。深さは東側では20cm、西側では10cmと浅くなる。土地を南北に区画するための溝であろう。

溝2 (SD02)

南北方向にのびる溝。幅45~50cm。断面の形状は、中段がつく2段構造をしており、西側の溝が深い。溝の掘り直し等により2つの溝が組み合わさったものと見られる。



第6図 調査区配置図



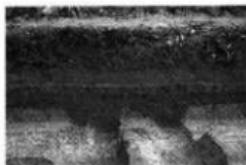
第7図 遺構平面図・土層図

遺構番号	最大規模(cm)		出土遺物	出土遺物実測図 第9図
	幅	深さ		
SD01	85	20	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器	2 5 6 7 12 14 15 16 23 24 25 26 31 34 35
SD02	50	20	須恵器・土師器・瓦器	3 8 18 21 27 32
SD03	50	18	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器	29 30
SD04	30	8	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器	19 20
SD05	70	15	弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器・瓦器	
SD06	(15)	4	古式土師器・土師器	
SD07	30	5	古式土師器・土師器	
SD08	30	6	古式土師器	
SD09	18	3		
SD10	25	3.5		
SD11	12	3		
SD12	(24)	5.5		

第3表 溝遺構一覧

### 溝3 (SD03)

溝2 (SD02) と平行してのびる。幅40~50cm、深さ15cm。底部は丸くU字型をしている。底部に足跡とみられるくぼみが残る。



SD02・03 南壁

### 溝4 (SD04)

東西方向に溝1 (SD01) と平行してのびる。幅30cm、深さ7 cm前後。底部は丸い。溝12 (SD12) と東側は重なる。

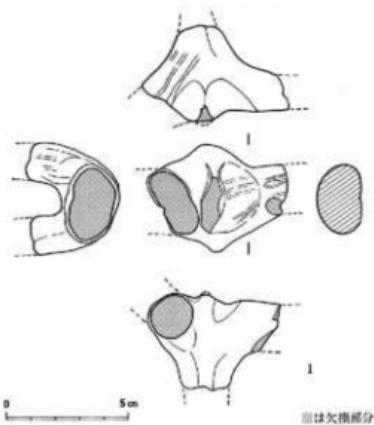
### 溝5 (SD05)

やや角度を降るが、東西方向にのびる。幅20~70cm、深さは東側では15cm、西側では8cm。底部は丸い。

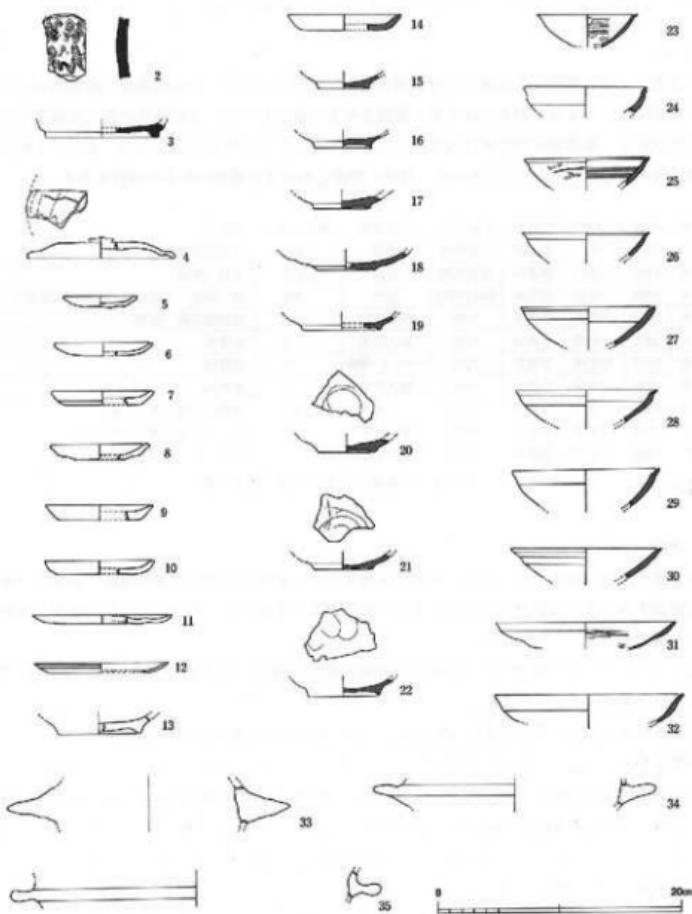
### (3) 遺物〔第8・9図、図版9〕

中世の土器を中心に、弥生土器、古式土師器、須恵器などが出土した。弥生土器、古式土師器については小片で図化は行わなかった。弥生土器については在地産のものである。

1 土製品。土馬の体部、脚部の一部。土師質で赤褐色。灰色細粒砂層(7層)の構造検出面上から出土した。胎土に2mm程度の砂粒を含む。重さは56g。頭部や脚部の先端などが欠損している。脚部上面に鞍と見られる表現が残る。全体的にナデで仕上げてある。作成年代は不明だが、奈良時代のものであろう。



第8図 出土遺物実測図(1)



第9図 出土遺物実測図(2)

2、3は須恵器。2は古墳時代、3は奈良時代後半のものである。4は、杯蓋。上面に傷があり、ヘラ記号の可能性もある。5~12は土師皿。13は土師質の椀。33~35は土師質の羽釜の鍋。14~32は瓦器。瓦器は、作りが粗雑である。27は楠葉型の瓦器柄である。

#### (4) 小結

中菴畠・一水口遺跡の西部域での発掘調査は未実施であったが、今回の調査で遺跡西方のひろがりを確認できた。今回の調査では中世の遺構を中心に検出したが、古墳時代の柱穴を検出したことは注目される。集落域が調査地付近までひろがっていたことが明らかとなった。また、土馬という祭祀に関する遺物が出土したことから、付近に祭祀に関係する遺構がある可能性もある。

次数	年度	遺跡	調査期間	調査担当者	調査原因	調査面積m <sup>2</sup>	概要
1次	1993	一水口	権考研	小栗明彦	道路	1,060	水利関係造構（中世）
2次	1996	一水口	権考研	清水昭博	道路	150	土坑（中世）
3次	1999	中菴畠	権考研	小池香津江	道路	790	溝（弥生～古墳）掘立柱建物（弥生？）
4次	2001	中菴畠	市教委	矢田	個人住宅	6	遺物包含層（中世）
5次	2002	中菴畠	市教委	矢田	個人住宅	2	氾濫原
6次	2002	中菴畠	市教委	矢田	マンション埋塗	2	達構面
7次	2002	中菴畠	市教委	矢田	個人住宅	7	氾濫原
8次	2003	一水口	市教委	矢田	店舗	1,500	水路（古墳）溝（中世）
9次	2004	中菴畠	市教委	矢田	個人住宅	32	柱穴（古墳）溝（中世）
10次	2004	中菴畠	市教委	矢田	老人福祉施設	53	土坑・溝（古墳）溝（中世）

第4表 中菴畠・一水口遺跡 調査一覧

#### (5) 考察

中菴畠・一水口遺跡については、竜田川を境界にして遺跡の北部を中菴畠遺跡、南部は一水口遺跡と細分することが可能である。現在まで10回の調査が実施され、市内では比較的情報が蓄積されている遺跡である。

これまでに得られた情報から、北側の中菴畠遺跡と南側の一水口遺跡では、遺跡の様相に違いがあることが明らかとなってきている。

おおまかに言うと、中菴畠遺跡は集落域、一水口遺跡は生産域ということになろう。

中菴畠遺跡について現在までに明らかになってきたことをまとめておきたい。〔第10図〕

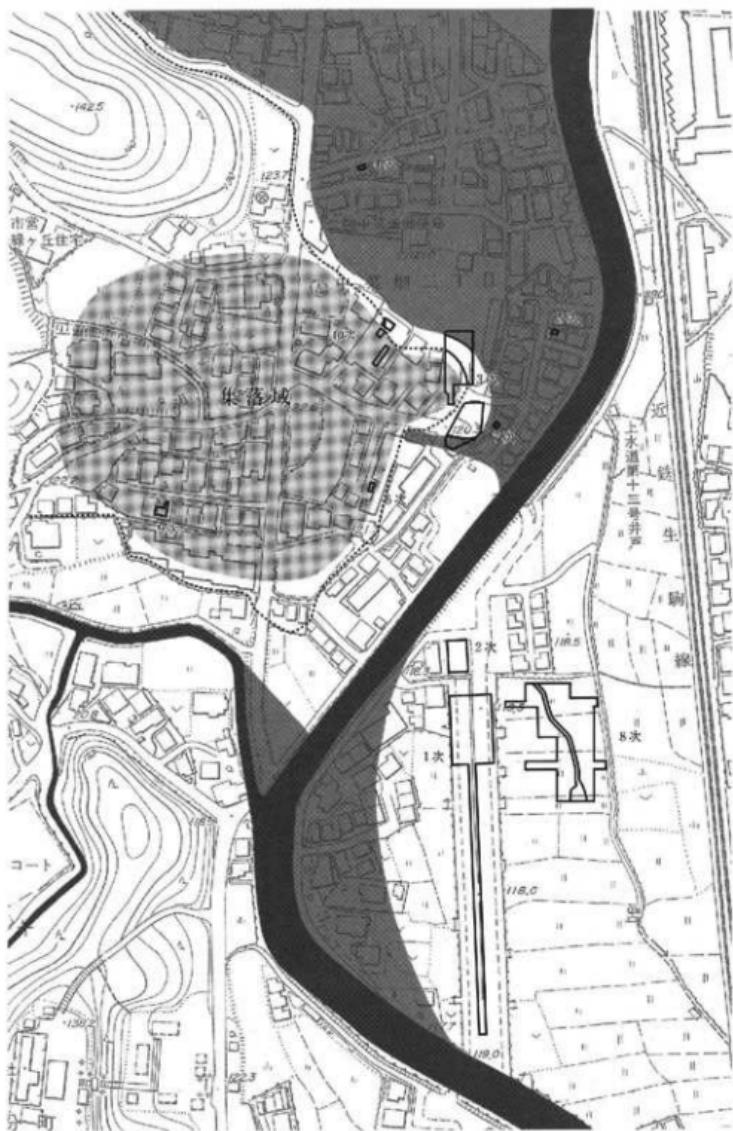
中菴畠遺跡周辺は現在、住宅地となっている。今回までの発掘調査で、竜田川に向かって現地形より埋没している谷地形や河岸段丘が存在することが明らかとなってきた。

段丘上には弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在した。集落から眼下に眺めると、竜田川とその氾濫原がひろがっていたことであろう。

第3次調査の南区では、氾濫原に弥生時代から古墳時代にかけての排水用に使用されたと見られる2条の溝を検出している。

こうした低地にも、弥生時代から溝を掘削し開拓を行ってきたことは注目に値する。

これらの谷や段丘の下段は、中世以降、埋没していく。第10次調査では、谷を人為的に埋めて造成した痕跡を検出している。川に近い部分では氾濫による洪水堆積物が積もった場所もある。こうして埋没した低地は、中世以降しだいに耕作地化されていった。



第10図 中森烟・一水道遺跡集落想定図

第9次調査地のような段丘上でも、おおよそ14世紀頃に古墳時代の生活面を削平し、耕作地化されていく過程がみられる。

このように、戦後に民家が建ち出す以前の田畠がひろがる景観は、おおむね中世の段階にできあがっていたものと考えられる。

#### 4 まとめ

今回の調査で、中葉畠・一水口遺跡の集落域や景観の変遷を推定する資料を得ることができたが、弥生、古墳時代の集落の状況は依然として十分解明できたとはいえない。今後の継続的な調査により遺跡の全容解明がなされていくことを期待したい。

## IV 菜畠城跡第1次発掘調査

### 1 はじめに

西菜畠町1663、2934で、個人住宅建築工事にともなう埋蔵文化財発掘の届出を受けた。

調査地は、菜畠城跡の東側に位置し、遺跡の範囲確認等のための発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、2004年12月8日に実施した。調査面積は、約5m<sup>2</sup>であった。

### 2 位置と環境 [第4・11図、図版10]

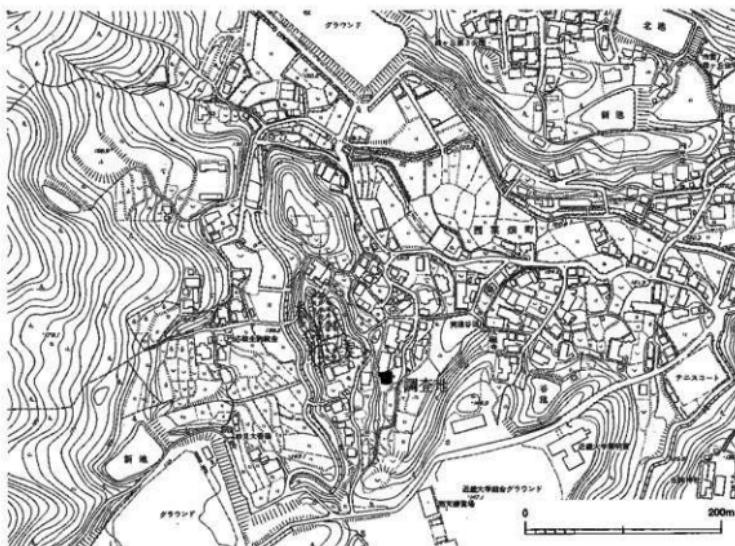
菜畠城は、生駒山地の山すそに位置している。

南北を尾根にはさまれた、出合川の谷筋に西菜畠の集落がひろがっている。その最も西の奥に、小高い丘があり、頂部に曲輪がつくられている。

調査地は、この小丘陵の東向き斜面の中腹に位置している。

菜畠城は小字「福葉山」「城山」「堀口」に位置している。長方形の主郭と北郭があり、主郭の東西に腰郭が付く構造とされる。城の西側には川が流れ、南東側は深い谷になっている。郭の北側の小山も城の一部であった可能性も考えられる。

城主などの詳細は、文献などの史料がなく不明であるが、在地の土豪の城館とされている。「大乗院寺社雜事記」にみえる「生馬両職人」と称される勢力の城の可能性もある。



第11図 調査地位置図

### 3 遺跡の調査 (図版10~12)

調査地は、家の納屋とその南側に池があった場所である。建物の解体後、調査を実施した。掘削を行った結果、表土直下で地山を検出した。すでに家を建築する際に、山の斜面を削平し、平坦面を作ったものと考えられる。調査地に、菜畑城跡と直接関係する遺構が存在する可能性は低いものと考えられる。

この調査に際し、イモ穴を検出したので報告する。

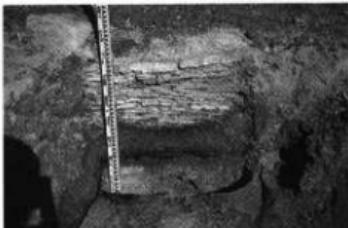
解体前の納屋が存在した場所で発見した。保存状態は一部破損していたが、検出長南北約1.7m、東西約1m、深さ約0.7m。地山の青灰色粘土を底部とし、その上面にもみ穀を敷き詰めてある。北壁にはスレート瓦を重ねて積み上げ、最上部に石を並べている。その他の壁面は素掘りであった。

土地所有者の方にこの穴について尋ねたところ、この穴は「イモアナ」と呼ばれ、収穫したサツマイモを冬季に保存するために使われていたということであった。

サツマイモは凍ってしまうとだめになってしまふため、この穴で保存したという。昭和35年頃まで利用されていたということであった。

### 4 まとめ

今回の調査では、菜畑城に直接関連する資料を得るにはいたらなかったが、城の規模、郭状況を解明するためにも継続した調査が必要である。近現代のものであるが、イモ穴が出土した。民俗資料として注目できよう。



イモ穴 北壁

## 図 版



調査地より見た生駒山

図版一 生駒市全域航空写真



図版2 中菜烟・一水口遺跡第9次発掘調査



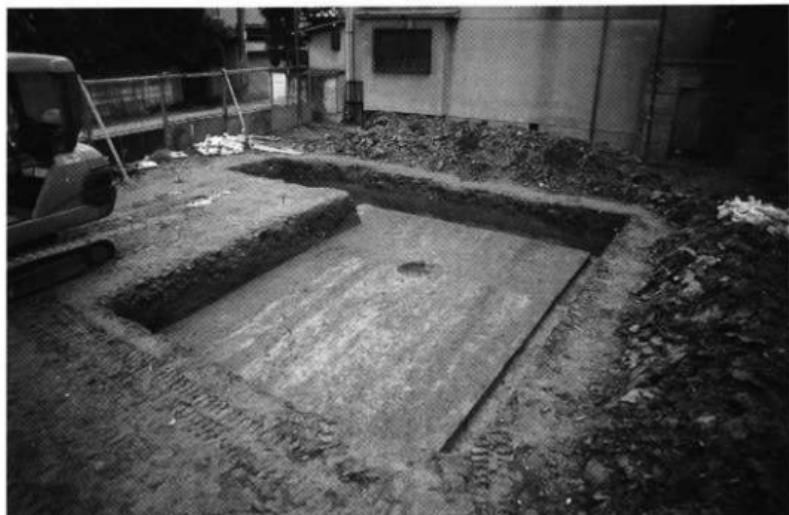
1 調査地付近航空写真



2 着手前状況（北東から）



1 造構検出状況（東から）

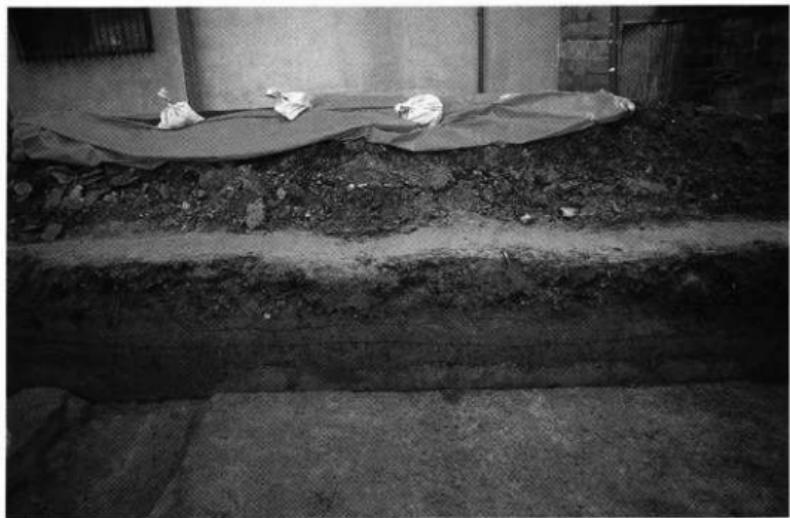


2 造構検出状況（南西から）

圖版 4 中菜烟・一水口遺跡第9次発掘調査



1 東壁土層



2 東壁土層（部分）



1 南壁土層（部分）



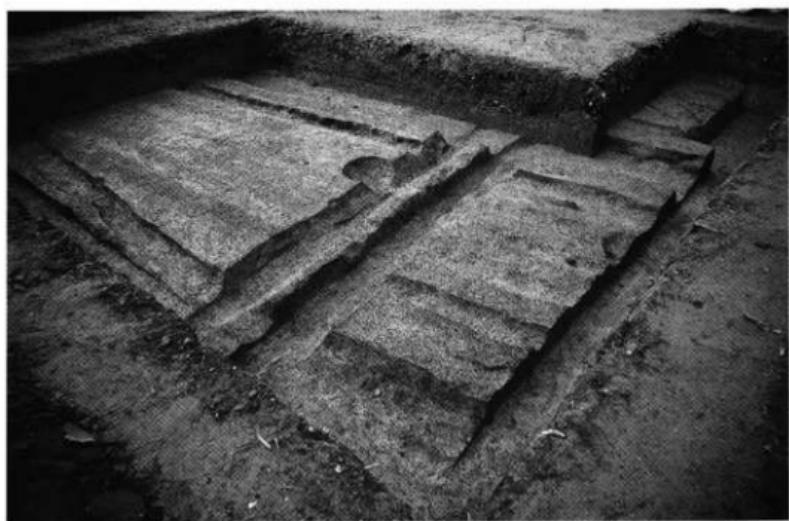
2 槽5（SD05）弥生土器出土狀況



1 遺構掘削前後状況（東から）



2 遺構掘削後状況（北東から）



1 遺構掘削前後状況（南東から）



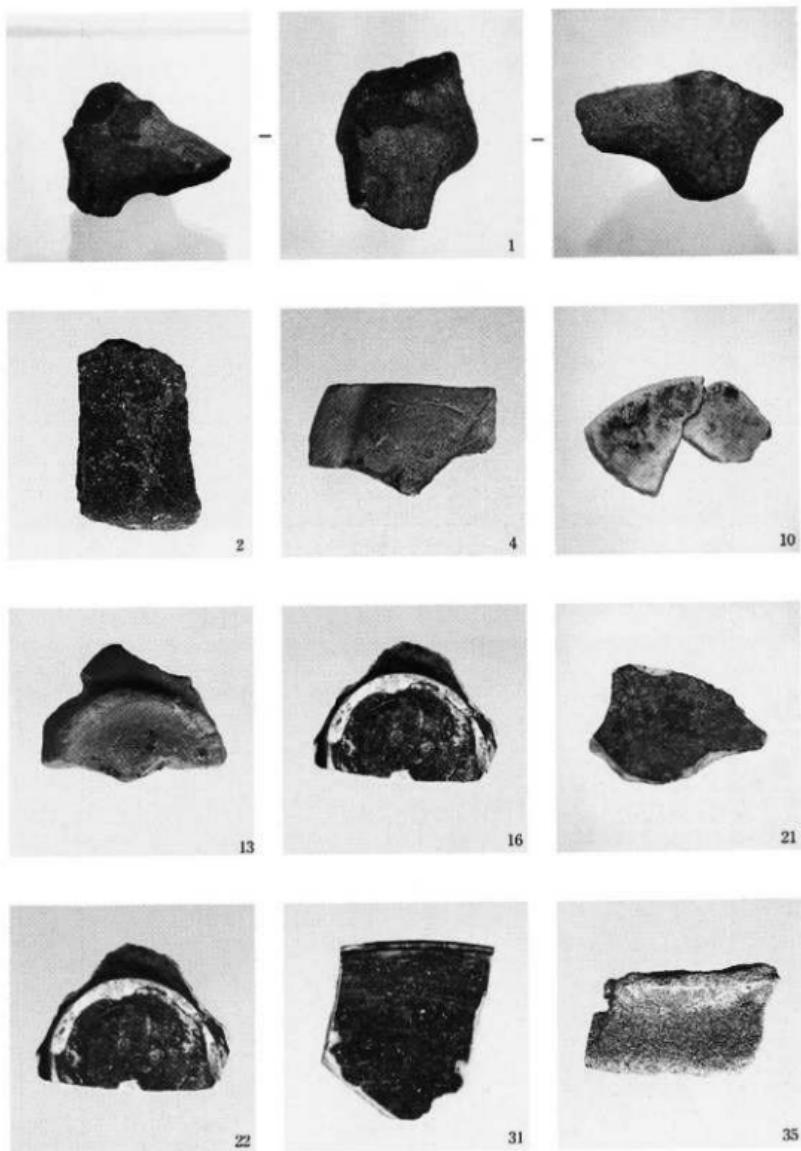
2 遺構掘削後状況（調査区東側）



1 ピット 1 (SP01)



2 溝 2 (SD02) - 溝 3 (SD03)



出土遺物



1 菜畠城跡遠景



2 着手前状況（東から）



1 イモ穴（東から）



2 イモ穴（南東から）



1 イモ穴（北壁）



2 トレンチ南壁



表土除去作業



遺構検出作業



遺構掘削作業



出土遺物実測作業

調査風景

## 報告書抄録

ふりがな	いこましないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ 2004ねんど							
書名	生駒市内遺跡発掘調査概要報告書 2004年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	生駒市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	矢田直樹							
編集機関	生駒市教育委員会							
所在地	〒630-0288 奈良県生駒市東新町8番38号				TEL 0743-74-1111			
発行年月日	西暦 2005年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
中菜畠・ 一水口 遺跡	奈良県生駒市 西菜畠町1496 -3、1496-4	29209		34° 40° 51°	135° 42° 15°	20041129 20041203	32	個人住宅 建築工事
菜畠城跡	奈良県生駒市 西菜畠町 1663、2934	29209		34° 40° 46°	135° 42° 00°	20041208	5	個人住宅 建築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中菜畠・ 一水口 遺跡	集落跡	弥生 古墳 奈良 中世	柱穴 1 溝 12	弥生土器 土師器 須恵器 土師器 瓦器	土馬が出土			
菜畠城跡	城館跡	中世 近代	イモ穴 1					

生駒市文化財調査報告書 第19集  
生駒市内遺跡発掘調査概要報告書  
2004年度

2005年（平成17年）3月31日

編集・発行 生駒市教育委員会  
奈良県生駒市東新町8番38号

印刷 株式会社 明新社  
奈良市南京終町3番464号

